

△1. 相場コメント

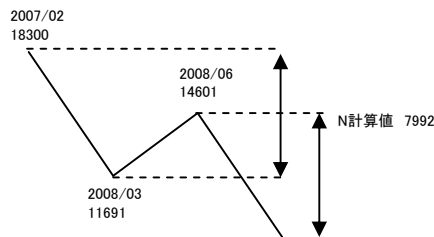
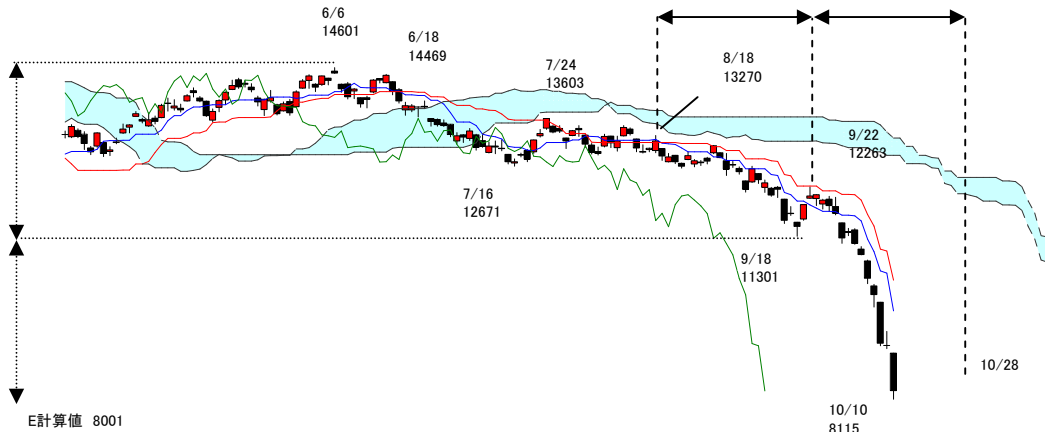
(株)経済変動総研 細田哲生

前回相場コメントでは変化日より相場水準のあり方を強調し、7月16日の(1)E 10741。9月18日から22日までを第二波動とした場合の計算値(2)N10485(8月29日 起点)。2000年高値からの大きなP計算値(3)10136。を提示しました。

10月安値の変化月として決まるためには最悪でも(2)を相場水準としたモミアイを演じる必要があること、目先の変動では「10741を割らずに反発ならば目先転換線、10月9日までの上げを、割るようならばそのまま少なくとも(2)水準までの下落を想定しつつ一週間を見ていきたいと考えます。」

としましたが、既に危機的状況は表面化しているため、そのまま暴落の懸念もあるという事も述べました。

週明け6日の終値は何とか(2)水準を維持できたものの、翌7日には1万円を割り込みまして、そのまま歴史的な大暴落につながる結果となっています。



10月10日安値8115は昨年2月高値からの三波動構成におけるN計算値7992に近いものであり、2003年4月安値7603までは僅か500円、割り込むのも時間の問題、という位置にあることでもこの変遷の凄まじさが判ることでしょう。

10月6日ブログでは「土曜日はあまりの状況の悪さにうんざりしつつ、今週の変動に不安よりも恐怖を覚えたのでありますが、変化日より計算値に重きを置くべき局面と言えるでしょうか。早い段階で相場が決まってしまうようならば、2003年安値まで一直線ということも有り得る状態と考えます。」

としましたが、コメントした本人が驚くほどの変動でありました。

10月10日のNYも悪いという事で、連休明けの10月14日も期待できる状況には無いのでありますが、9月18日でのE計算値(6月6日起点)は昨年2月高値からの三波動でのN値7992に見合うものとなります。時間関係は8月29日からの三波動構成が確認できる程度でありまして、8月18日からの時間関係を成すまでは落ち着かぬでありましょう。

10月第4週、あるいは最終週ということになりますが、現時点でここまで下げ渋りを見せる変動とは考えにくく、反発力を見せても転換線までは容易ではありません。従って今週は静観あるのみと考えますが、10月10日まで11陰連、しかも順動でありまして、N値を割っては更なる暴落も念頭に置く必要はあるかと思えます。

前回お詫び欄で述べましたように、早い段階で相場は決まってしまったのでありまして、次回から改めて罫線講座、個別銘柄解説を再開することとしますが、個別銘柄解説もまた積極的に現在性を探るものではなく、過去変遷を確認、反省するものとなるでしょう。

罫線講座は日経平均株価が新たな局面を迎えたということでもありますので、1989年天井からの変遷を丁寧に振り返りながら均衡表の基本事項を再確認していこうと思っています。

10月6日のブログ限定記事をご紹介しますが、前回の相場コメントと併せてご覧ください。

「これまで何度か10月が重要と述べているが、今回は10月変化月について触れておきたい。

先ず月足変遷における重要な節目からの基本数値の重なりが見られること。昨年10月高値から13ヶ月、昨年6月高値から17ヶ月、2005年5月安値から42ヶ月、2004年8月安値から51ヶ月、2003年4月安値から67ヶ月。

2000年4月高値を中心と置けば1991年10月高値から103ヶ月、2000年4月から今月まで100ヶ月という対等数の関係でもある。

ここで2001年8月陰線安値10684に注目してほしい。

67ヶ月目が昨年2月高値、83ヶ月目が今年6月高値となり、 $87(13 \times 3 - 2 = 37, 37 + 51 - 1 = 87)$ ヶ月目の今年10月、この水準に達してきた、ということであるから先に述べたことと併せても大事なポイントと言えよう。

また2000年4月からの変動を中間波動と見なすためには $20833 - 18300 = 2533, 7603 + 2533 = 10136$ を割ってはいけないことになるが、これを割っては2007年2月高値までの上昇を下げの第二波動として見なさざるを得なくなる。

従って10136を割り込む場合、10月が安値の変化月とならないことは直ちに2003年安値を脅かすものに繋がるものとして今月の変動に望みたい。

$(10136 + 10684) \div 2 = 10410$ は月足遅行スパンを下支えする可能性を残す先行スパン下限位置10463に見合うものとなる。

遅行スパンは月末終値であるから、最悪の場合でも10463を相場水準とするモミアイを演じられねば10月変化月が安値で決まることは難しい。

10月変化日は極めて多く、現時点で適切なものが見当たらない。

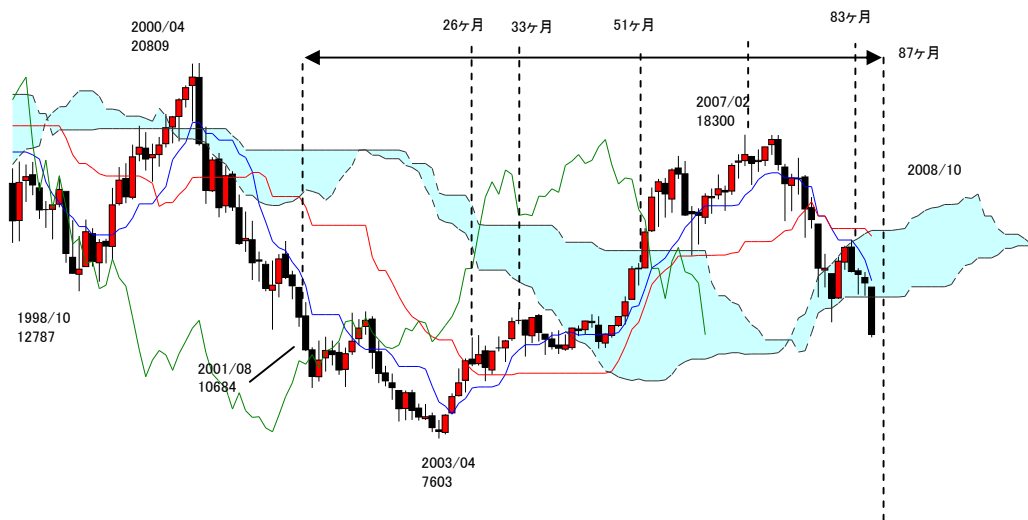
従って売りはあっても買い場は見出しにくく、当面変動を見守る必要があるだろう」

(10月11日記)

## △2. 日経平均株価月足変遷 (株)経済変動総研 細田哲生

前回月足における10月変化月についての解説で、2001年9月陰線からの基本数値87ヶ月目にあたる。としました。

原稿を書き終えてから誤りに気がつき、改めて整理したのですが結論としては大筋変わらぬこと、むしろ「最悪でも10月変化月で10400円を相場水準とするモミアイを演じられねば03年安値を脅かすものになる」という想定を強調するものであったため訂正せずに掲載したのであります。



先ず改めて整理すれば2001年8月からの基本数値87ヶ月が正しいものとなりまして、

2001年8月陰線安値10684を相場水準と置けば26ヶ月目同水準、33ヶ月目高値、51ヶ月目が05年10月陽線となります。10684 × 2 - 7603 = 13765をモミアイの高値の限界とすれば2005年10月高値13783は一つの限界でありました。2005年11月この水準を

上抜くと同時に先行スパン上限を上抜きまして、一応の上離れを確信できるのであります。67ヶ月目が2007年2月高値、83ヶ月は今年6月高値、87ヶ月目が今月となりますが、先週コメント時の10月3日安値10938は正に同水準に達するという局面でありました。

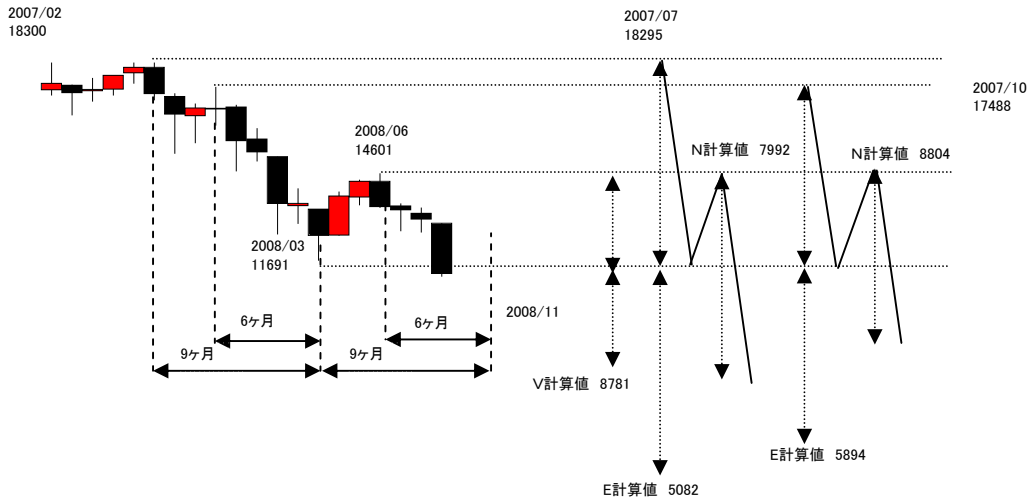
ここで改めて2001年9月陰線を相場水準と置けば、26ヶ月目同水準、33ヶ月目5月安値が同水準、47ヶ月目に12000円近くまで達し、48ヶ月目の8月続伸することで上離れを確認できるでしょう。51ヶ月目が05年11月陽線となりまして、月足先行スパンを上抜く結果となっています。以降74ヶ月目(33+42-1)が07年10月高値、87ヶ月目は来月11月ということになります。

従って2001年8月陰線安値10684、2001年9月陰線の高値10812、ここでの運行スパン10559、安値9382、何れも相場水準と置くことが出来、またその基本数値が大きなヒントとなりうることは理解されることでしょう。

さて来月11月は高値からの下げ三波動構成を見れば重要な変化月となりまして、昨年10月高値から6ヶ月下げ、4ヶ月戻し、6月高値から6ヶ月目であると同時に昨年7月高値位置からは9ヶ月の下落に対し3月安値から9ヶ月目ということになります。

計算値はE5082、5894、N7992、8804、NT10902、V8781となりまして、10月3日時点でNT10902に見合う位置に達していたことが判るでしょう。

ここで10月が下げ止まりとならない場合、三波動構成から考えれば少なくとも11月7992までの下落は予想されることとなり、2001年9月安値9382を大きく割り込むこととなります。



また今年8月は変化月として重要視し、週足変遷でも極めて重要な現れ方を確認できますが、6月変遷からの変動を考えた場合、8月を中心とすれば3ヶ月、3ヶ月で10月が変化月、8月安値でのE値10661なのでありまして、この水準を割り込むことは6月以降の下落の独立性を明確にするものであることも判るでしょう。

これらと均衡表図表、大きなP計算値を併せれば、前回相場コメントに繋がるものとなりますが、日足においても10400円を相場水準と出来ぬ変動では9月22日までの戻りの第二波動としての意味を強調するものであった訳であります。

さて8月変化月の意味合いについては週足でコメントする予定でありまして、今回はこの点について述べるつもりでしたが相場状況を鑑みて次回へまわすこととします。

この10月変動は下げが加速した変動であるのか、安値となるのか今の早い段階では判断がつかぬのでありますが、10月10日における8115は大きなN計算値7992に近いということで改めてこの水準を割り込むか否かを探ることになるでしょう。

これを割ってしまえば2003年安値は目と鼻の先でありまして、2000年高値からの変動を考えれば5000円台の計算値は取らざる得ないことも想定可能かと思えます。

2010年2月まではまだ17ヶ月の時間が残されているのでありまして、今はただ嵐が収まる糸口をつかむという段階に過ぎぬことも強調しておく必要があるかと思えます。

(10月11日記)